

論文

街路名のトポグラフィー ——19世紀パリからサイゴンへ

丸山 宗志^{1,2}, 大塚 直樹³¹松本大学大学院総合経営研究科, ²松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科,³亜細亜大学国際関係学部多文化コミュニケーション学科The Topography of Street Names from Nineteenth Century Paris, France,
to Saigon, VietnamMARUYAMA Motoshi^{1,2}, OTSUKA Naoki³¹Graduate School of Comprehensive Management, Matsumoto University²Department of Tourism and Hospitality, Faculty of Comprehensive Management, Matsumoto University³Department of Multicultural Communication, Faculty of International Relations, Asia University

要 旨

本論文はフランス植民地時代に作製された旧版地図を参照しつつ、第1に植民地主義的な介入がおこなわれたサイゴンの都市空間を街路の名付けから叙述すること、第2にパノラマ的な視点との混淆状況を紡ぎ出すための予備的な考察をおこなうことを目的とした。考察の結果、まず仏印時代のサイゴンの街路名がフランスの植民地支配の物語として表れていること、長い街路に対して宗主国からみて顕彰のレベルが高い人物の名が付与される傾向がみられることを指摘した。さらに第一次大戦の破壊的なインパクトが遠く仏印時代のサイゴンの地にも及んでいること、植民地の街路名が必ずしもフランス本国ないし植民地の領域に限定されないことを呈示した。以上から、フランス植民地期のサイゴンにおける街路の名付けは、同時代の社会状況のダイナミズムに埋め込まれた多声的な権力編成に基礎づけられていたことを明らかにした。

キーワード

街路名 場所の記憶 フランス植民地 旧版地図 サイゴン

目 次

- I. はじめに
- II. 19世紀パリ——方法論的覚え書き
- III. 街路名のエクリチュール
- IV. 街路の空間布置
- V. むすびにかえて——街路の布置構成

注

文献

I. はじめに

ベトナム南部最大の都市は、かつて（また状況に応じて今現在でも）サイゴンと呼ばれ、ベトナム戦争終結以降「建国」の父の名前を冠してホーチミン市と称される。第1区と名づけられたホーチミン市の中心街（図1）は、グエン朝の囲郭地区（ザーディン城）にルーツをもちつつも、フランス植民地時代に都市的な骨格が形作られた¹⁾。ホーチミン市では漸進的に再開発が進展しているものの、都市景観それ自体はフランス植民地期の建造物群に由来する。大きな景観の変化の一例としては、ベントイン市場の南西に隣接していたサイゴン駅（現：9月23日公園）が郊外に移転したことがあげられる。しかしながら、フランス植民地時代の建造物の多くが今現在も当該エリアに配置され、街路網もその大枠が維持されている²⁾。

こうした都市の風景の連続性と対照的に、ホーチミン市の街路名は幾たびかの変遷をたどってきている。街路名変更の歴史は、ホーチミン市の近現代史に一定のレベルで置換可能である。言い換えれば、街路名の変遷史は、権力の編成が別のそれにとって代わった結果として生じてきたともみなしうる³⁾。すなわち、グエン朝の統治から、フランスによる植民地支配、明号作戦以降の帝国日本による占領、ベトミンの統治、ベトナム共和国時代、ベトナム社会主義共和国時代となろう^{注1}。ただし当然のことかもしれないが、権力編成が置き換わっても変更が加えられない街路名も散見される。加えて名称が変更されても、旧名称が何らかのパターンで残り続けることもある。

街路名ではないものの、上述したようにサイゴンという地名は「状況に応じて今現在でも」人びとの口上にのぼる。旧名称を用いることには、名称変更につわる政治的なコンテキストに起因する場合や、ホーチミン市の中心部のみをサイゴンと呼ぶといった使い分けがなされる場合、人名との区別が難しいことに起因する場合^{注2}、単純にホーチミン市と比較して発音しやすいなど、多声的な背景がある。実際、筆者のホーチミン市在住の一部知人は、会話のなかでまったくホーチミン市という単語を用いない。

ここで街路それ自体に目を転ずると、街路とは一

義的には、人びとが往来する場である。したがってその視線は水平的ないし、装置という本義から転じた意味でのパノラマ的となる。これに対して特定の権力の手による街路の名付けは俯瞰的に、言い換えれば地図の上でなされることが多い。このことから、名付けられた街路を歩く実践はパノラマ的な視点と俯瞰的な視点が交錯する接点と見なしうる。

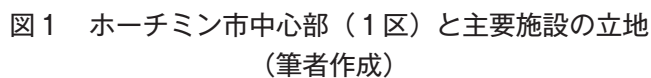
以上に鑑みつつ、本論文では旧版地図を手がかりにして街路名の地誌的研究を試みる。具体的にはフランス植民地時代に作製された旧版地図に刻まれた街路名を参照しつつ、第1に植民地主義的な介入がおこなわれたサイゴンの都市空間を、街路の名付けから叙述すること、第2にパノラマ的な視点との混淆状況を紡ぎ出すための予備的な考察をおこなうことを目的とする。

II. 19世紀パリ ——方法論的覚え書き

ベトナム（インドシナ半島）は1862年のサイゴン条約を皮切りにフランスの植民地支配に組み込まれていった。その後、19世紀末から20世紀初頭にかけて都市計画をはじめ、さまざまなインフラ整備が進展した。ここで19世紀のパリに目を向けると、産業革命にともなう資本主義社会の拡張と浸透、パサージュといった、産業化によって生み出された新たな建築資材を利用した都市景観の誕生、ナポレオン3世の帝政、オスマンのパリ改造、パリコミュンなどが同時代的なトピックとしてあげられよう。こうしたパリを「19世紀の首都」と位置づけたのがベンヤミンである。ベンヤミンのプロジェクトは、19世紀西欧近代の両義性、すなわち資本主義社会の暴力的抑圧の側面とユートピアへの展望とを描き出すことであった。言い換えればこれは、資本主義という神話を覚醒によって破壊すると同時にその神話のなかの夢のイメージを解放する試みともとらえられる。その骨子を示すべく収集され、また書きためられたメモが未完の、かつ通称『パサージュ論』である。

周知のように『パサージュ論』には多彩な主題からなる膨大な断片が納められている。本稿に沿ってここでは、パリの街路についてのメモに注目する^{注3}。以下、『パサージュ論』からの引用は断片番号で示す。

鹿島（2004）によれば、ベンヤミンの街路名の体



『パサージュ論』には「P パリの街路」という主題がみられる。そこに記された、鹿島も引いている、ベンヤミンの断片は以下となる。

3

かりではなく、さらに同時に、植民地帝国主義のモニュメントとしても感じられたのである。そこではその場の光景とアレゴリー的な意味が交差するのだが、だからといってそれがベルヴィルの中心部であることに変わらない。こうしたヴィジョンを引き起こすことができるのはたいていの場合、麻薬に限られている。ところが街路名もこうした場合に、私たちの知覚を押し広げ、多層的にしてくれる陶酔を起こすものとなる。街路名が私たちをこうした状態に誘ってくれる力を喚起力と呼びたい。——だがそういっただけでは言い足りない。なぜなら連想ではなくイメージの相互浸透がここでは決定的だからである。(Pl a, 2) ⁶⁾

さらに次のメモも街路名の多層性を醸し出している。

街路名がもつ魔力について。デルヴォーはモーベール広場についてこう述べている。「これは広場ではなく——これはただの大きな泥のしみだ。この13世紀の名前を言うと唇が汚れるほどである——その名が古いからではなく、それが泥の匂いを発して……われわれの嗅覚を不快にするからである。」A. デルヴァー『パリの裏側』パリ、1866年、73ページ。(P2a, 6) ⁷⁾

このメモには訳注で「モーベール広場の名は、サント＝ジュヌヴィエーヴ修道院の第二代修道院長ジャン・オーベール（12世紀）に由来するようだが、この広場は16世紀から18世紀までは刑場として使われ、19世紀前半には、パリの乞食の溜まり場で、売春宿やいかわしい酒場が多かった。こうした歴史的事実と『悪』を意味する『モー』が結びついてこうした見方が出てきたものと思われる」と付記されている。

鹿島はさらに「パリの街歩きという魅力に取り憑かれた遊歩者にとって、街路のシニフィエ（立ち並ぶ商店の誘惑、ビストロや笑いかける女たちの誘惑）よりも、街路のシニフィアン（通りの名前）のほうが磁力が強くなるという逆説」⁸⁾を指摘している^{注4}。

近森（2004）は、レヴィナスの「懇請する読み」に着目しつつ、これに相当するような都市の「読み」

の理論をベンヤミンの都市論から導き出すため、上述の「P パリの街路」に注目している。近森によれば、一見些末であるようにみえる街路名は、言語や記憶、歴史といった、ベンヤミンの都市の理解に不可欠な主題群の結節点になっているという。これはさらに、都市を「読む」主体が読みの過程で陶酔しつつ主題の構成を組み換えられてゆく事態についてのベンヤミンの思考をたどるうえで好個の糸口であると指摘している⁹⁾。

魔術的な力を有する街路名の論理について、近森はベンヤミンの断片を引用しつつ、街路の名前において重要なのは、名の指し示す物理的な街路ではなく、言葉としての名そのものの感覚的な印象、あるいはそれが喚起する視覚的ないし音声的なイメージにはかならないと指摘する。さらにこうした「名」の力が現実の街路と想起されたイメージを二重視させるという¹⁰⁾。これはまた、現実の物質的な街路のネットワークから構成される都市とは別に、それぞれの街路につけられた名前の集積としての言語的な都市ともいえる¹¹⁾。

以下、近森も引いている、ベンヤミンの二つの断片を引いておく。

街路名が表している真の性格が認識されるのは、街路名を規格化するために行われる改名提案と比較してみた場合である。(P2, 4) ¹²⁾

言語革命がもっともありふれたもの、すなわち街路によって遂行されたのである。——都市は街路名によって言葉の宇宙となる。(P3, 5) ¹³⁾

以上から街路名は、その名のもつ感覚的・音韻的なイメージ、またはアレゴリー的な意味と物質的な街路とが重ね合わせられ、遊歩者の前に立ち現れるといえよう。なお『パサーージュ論』の見取り図については、三島（2019）が次のように指摘している。

ファンタスマゴリーの内に積極的・肯定的なものを読み取るのではなく、それが別の可能性への〈シグナル〉を与えていることを読み取るのだ。過去に起きたことばかりでなく、ここでならありえたかもしれないことを読み取るのだ¹⁴⁾。

またやや話がわき道にそれるが、ベンヤミンは「パリ——19世紀の首都」（ドイツ語草稿）のエピグラフでグエン・チョン・ヒエップというベトナム人の詩を引いている¹⁵⁾。さらに「パリ——鏡のなかの都市」では「この都市[パリ]をきわめて情熱的に愛する者は、ほとんどつねに、外からやってきたのだ」「そのなかには、1897年にハノイで、フランスの首都への頌詩を出版したグエン・チョン・ヒエップ（未詳）がいる」¹⁶⁾と記述している。

グエン・チョン・ヒエップ (Nguyen Trong Hiep) なる人物は同論考において「未詳」とされている。この人物はおそらく、Nguyen Trong Hop を指すのであろう。Nguyen Trong Hop (1834-1902) は字を Trong Hiep と言い、グエン朝の大官で1894年、使節団の一員として渡仏した。ヒエップは1897年、そのときの体験を基にしたと思われるパリに関する詩集を発表した。詩集のベトナム語タイトルは、Ba Le, Thu do Phap quoc である。Ba Le は Pa-ri (パリ) の旧称で、タイトルは『パリ、フランス国の首都』となる^{注5)}。

「外からやってきた」人物にベンヤミン自身が含まれるとも想像しうる。この点についてベンヤミンは、フランツ・ヘッセル著『ベルリン散策』の書評「遊歩者の回帰」において、「現存するすべての都市描写を、その著者たちの生誕地によって二つのグループに分けようとしたとき」¹⁷⁾ 土地に生まれの人が書いたものは非常に少数であると指摘している。その上で、その土地生まれの者として、ある都市の像を手に入れるためには、異国情緒的なものや絵のように美しいものを求めて遠くへ旅する者の動機ではなく、過去へ旅する者の動機が必要であると叙述している¹⁷⁾。19世紀の社会史という『バサージュ論』の目論みを下敷きにすれば、パリの遊歩者ベンヤミンは、異なる社会にルーツを持ちつつ、過去を旅するその土地生まれの者という両義的な存在として位置づけられるのかもしれない。三島によれば、「ベンヤミンとパリとのつながりは深い。彼の受けた知的社会化は今ではドイツではきわめて薄くなったフランス志向の教養である」とし、ベンヤミンの家には住み込みのフランス人マドモアゼルがおり、初めてのパリ訪問時からフランス語には不自由しなかったと指摘している¹⁸⁾。

さらには19世紀末にフランスを訪問したベトナム

人がパリを賞賛する詞を残している点に目が向く。ベンヤミンがエピグラフで引いていることに鑑みて、ヒエップの詩に遊歩者のイメージが重ね合わされたのであろう。これはまた、フランスの植民地主義的な支配／被支配にみるもう一つの幻像を提示しているとも読みうる。

方法論的覚え書きの最後に、ベンヤミンの「パリ——鏡のなかの都市」の一文を引いておく。「というのも、街区全体が、己の秘密を打ち明けるのは、そこにある通りの名においてなのだから」¹⁹⁾。

Ⅲ. 街路名のエクリチュール

フランス植民地時代に形作られた都市サイゴンの街路名の記述にあたり、ここでは立教大学アジア地域研究所所蔵のPlan de Saigonの1万分の1の地図を利用した。参照した旧版地図は、インドシナ地理局 (le Service Géographique de l'Indochine) によって製版されており、作製主体のあとに「ベトナム国家地理局により再版 (Réimprime par le Service Géographique National du Viet-Nam)」と明記されている。作製年の明記がないものの、後述するように第一次世界大戦にまつわる街路名が付与されていることから、終戦 (1918年) 以降に調製された図版と推察できる。各通りの名称の由来などはまた、Andoré Baudrit (2022) から引用した。『Guide Historique des Rues de Saigon = サイゴンの街路に関する歴史ガイド』とのタイトルを有する同書は、1943年にインドシナ印刷書店協会から出版され、2016年に「Les Entreprises coloniales françaises = フランスの植民地企業」から復刻版がオンライン上で公開され、2022年に改訂されている²⁰⁾。

本論ではPlan de Saigonの図版のうち、現在の行政区分で第1区に相当する部分を研究対象とした。第1区の街路名の抽出にあたって、旧版地図の凡例を参照した。したがって、凡例に記載がなく、図幅のみに記載された街路名は原則、省略している。

全6章構成からなるBaudrit (2022) では、第5章「サイゴンの街路」において街路名の由来などを詳述している。同書では街路名をカテゴリー化して解説している。本章ではこの分類を援用して分析を進める。表1に抽出した街路名を類型化して示した。表1のなかで小分類がBaudritによる分類で、それを分析の

便宜上、大分類化している。なお、Baudritが街路名をアルファベット順に記述しているのに対して、表1は縦軸の上からおよそ時系列にそって並べ替えている。

ここから以下の点を指摘できよう。まず、街路の名付けには、フランスによるサイゴン征服から統治へ向かうストーリーが看取される。言い換えれば、フランス植民地支配が顕彰される形で、征服前後か

らその統治に関連するような街路名が付与されている。ここには宗主国側だけでなく、後述するようにフランス植民地支配に協力・貢献したベトナム側の人びとも含まれている。

次に街路名称のうち、人名と地名を比較してみると、圧倒的に人名に基礎付けられたケースが多いことがあげられる。街路名119件のうち、実に101件、85パーセントが人名由来となっている。地名由来の

表1 サイゴン中心市街地（現：ホーチミン市1区）における街路名の分類（フランス植民地時代）

大分類	小分類	フランス語	人名	地名	その他	小計
征服前	先駆者	Précurseur	3			6
	フランス元帥	Maréchal de France	2			
	グエン朝官僚	Grand mandarin annamite	1			
征服	征服	Conquête	17	1		21
	船員・外交官・探検家	Marin-diplomate-explorateur	1			
	提督・征服	Amiral / Conquête			1	
	海兵歩兵連隊将校	Officier d'infanterie de Marine	1			
キリスト教	教会	Ecclésiastique	7			9
	司教	Évêque	1			
	司教・外交官	Évêque et diplomate	1			
提督・総督	提督・総督	Amiral-gouverneur	7			10
	提督	Amiral	1			
	総督	Gouverneur général	2			
政治家・官吏	カンボジア統治者	Souverain du Cambodge	1			28
	常駐将軍	Résident général	1			
	コーチシナ知事	Gouverneur de la Cochinchine	2			
	文民総督	Gouverneur civil	1			
	市長	Maire	4			
	副市長	Adjoint au maire	1			
	政治家	Homme politique	2			
	市議会議員	Conseiller municipal	5			
	市議会委員	Commissaire municipal	1			
	植民地評議会	Conseiller colonial	1			
	先住民問題監察官	Inspecteur des affaires indigènes	2			
	行政官	Administrateur	7			
民間	学者	Savant	1			8
	医学博士	Docteur en médecine	1			
	植物学者	Botaniste	1			
	医師	Docteur	1			
	商業	Commerce			1	
	不動産所有者	Propriétaire	3			
欧州大戦	1914-18大戦	Guerre de 1914-18	20	15		37
	航空機パイロット	Aviateur	2			
合 計			101	16	2	119

Baudrit (2020)より筆者作成

名称は、後述する第一次大戦（表中では「1914-18大戦」、ないし大分類では「欧州大戦」以下同様）にルーツを持つ街路名を除くと1件のみとなっている。この点について、宗主国の言語であるフランス語による名付けという点を除けば、日本の植民地支配、例えば台湾支配と比較してみると、植民地に対して宗主国側に存在する地名を付与することで、植民地という領域性を固定化しようとする戦略が読みにくいともいえよう。

第3に、植民地支配の顕彰のなかには、必ずしも征服・統治だけではなく、数は少ないものの、いわゆる民間人が含まれている点を指摘できる。特にフランス領インドシナ時代に何らかのつながりを有する理化学系の人びとが街路名に変換されていることが目を射る。最後に第一次大戦に由来する街路名の割合の高さがあげられる。前述のように、分析に用いている旧版地図が作製された年次は特定できていないものの、第一次大戦は当時、最新の出来事に分類されていたはずである。一般論で言えば、街路名はある程度「伝統」をもった／もたされた事項が対象となる場合が散見される。これに対して、直近の戦争ともいえる、第一次大戦に関連する街路名が119件のうち37件、30パーセント以上を占める点は注目に値しよう。

換言すれば、第一次世界大戦に由来する街路名の比重の大きさは、フランス（ないし西ヨーロッパ世界）にとって、この大戦の衝撃が社会に深刻な影響をもたらしたことを物語っている。西ヨーロッパ世界の人びとはこの戦争に国民的な正義感に基づき、楽観視して臨んだ^{注6}。しかしながら第一次大戦は、それが長期化するにつれ、戦争の甚大な被害状況を露呈していった。こうした結果、「啓蒙された」と信じていたヨーロッパ世界の人びとのうちに第一次大戦後、大いなる倦怠感が蔓延することになった。この時代の雰囲気や状況を反映するような著作には、シュペングラーの『西洋の没落』（1918年、22年）やハイデガーの『存在と時間』（1927年）など枚挙にいとまがない。

このことから、たとえ戦勝国であったとはいえ、第一次大戦を何らかの形で正当化しつつ顕彰しようとする強い意志がフランス本国から遠く、植民地ベトナムにおいても醸成されていたことが窺い知れる。第一次大戦に関連する街路名はまた、総数37件

のうち15件、約40パーセントと他のカテゴリーと比較して地名が多い。地名に由来する街路が多い理由として、前述のごとく、従来の戦争に比較して被害が甚大で死者数が多く、個人を顕彰する限界が露呈した面も想定しうるものの、植民地に宗主国の地名を刻み込むことでフランス・ナショナリズムを喚起しつつ、国威回復を目論んだこともあげられよう。

IV. 街路の空間布置

本章では先に表1に示した大分類に基づきつつ街路の展開を叙述してゆく。特に断りのない限り、地名・人名の由来などは、先に引いたBaudrit（2022）に依拠している。

1. 征服前

図2-1を参照すると、まず縦軸に総督官邸の東側を走るマクマホン通りが目を射る。マクマホンとは、フランス陸軍将軍であり、クリミア戦争で戦果をあげた、のちにフランス共和国大統領を務めた人物である。ただしノロドム宮殿以北は、旧版地図の凡例に記載がないものの、地図上にド・ゴール将軍通りと記されている。Baudrit（2022）にもまた、当該街路名の解説が存在しない。しかしながら、周知のごとく、第二次世界大戦におけるフランスのレジスタンスを指導し、第18代大統領となったド・ゴールを指しているであろう。

マクマホン通りの東側には、ほぼ平行してシャイノー通りが、またド・ゴール将軍通りと平行するようにカティナ通り布置されている。シャイノーはグエン朝の成立に重要な役割を果たしたフランス海軍士官で、カティナはルイ14世に仕えたフランスの軍事司令官であり、将軍・元帥であった。二つの街路の間には、ヴァニエ通りがみられる。この人物は後のザーロン帝、すなわちグエン・アインに仕えたフランス海軍士官および冒険家であった。またマクマホン通りとほぼ直交するダヨー通りのダヨーとは、ザーロン帝に仕えたフランス海軍士官および冒険家とされる。図中、最北に位置するレ・ヴァン・ズエット通りは、グエン朝官僚でザーロン帝の内政を担当した人物に由来する。

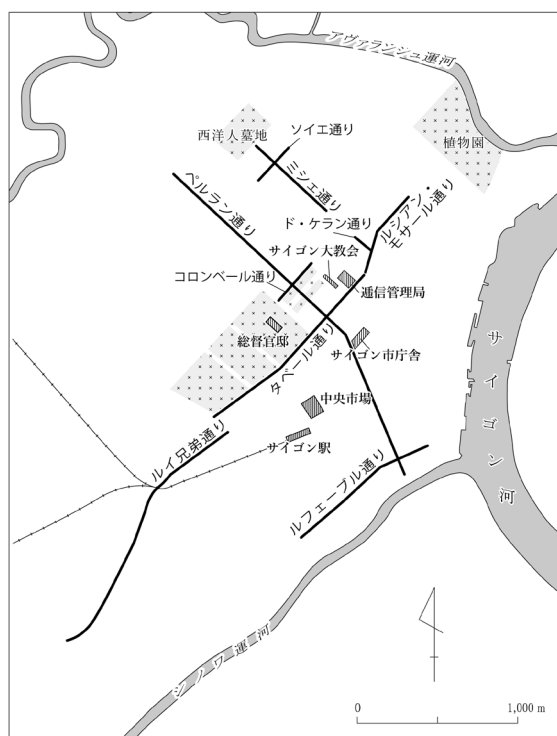
征服前のカテゴリーでは、相対的に距離が長い街



1) 征服前



2) 征服

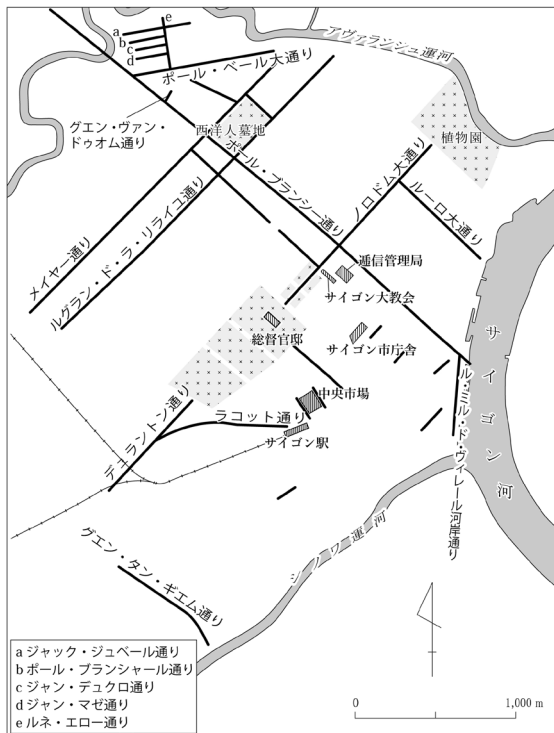


3) キリスト教

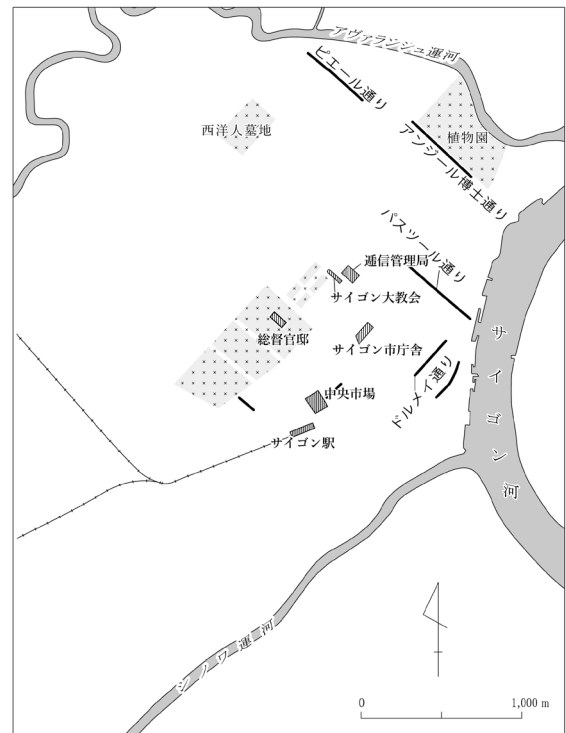


4) 提督・総督

図2 サイゴン市街地における街路の空間布置（フランス植民地時代：大分類）



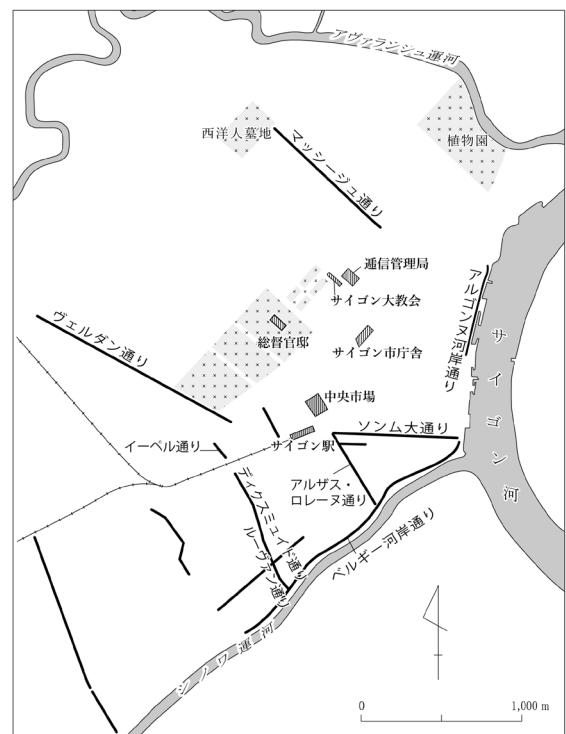
5) 政治家・官吏



6) 民間



7) 欧州大戦（人名）



8) 欧州大戦（地名）

図2 サイゴン市街地における街路の空間布置（フランス植民地時代：大分類）

路に対して、フランス国内の著名な軍人・政治家の名が配されるといえる。ベトナム最後の王朝であるグエン朝にゆかりがある人物が街路名に登場することもまた特徴として指摘できる。

2. 征服

当然ではあるものの、このカテゴリーでは軍人の名を冠した街路名が多数を占める。図2-2の北側に目を向けると、フランス海軍将校で海軍基地司令官であった人物の名前を冠するフーコー通り、その西端からはヴァソワニュー通りが布置されている。ヴァソワニューは、フランスの将軍でインドシナに派遣され、陸軍参謀長の監察総監、海兵隊、植民地の監察少将など歴任した。ヴァソワニュー通りとはほぼ平行する街路はフロスタン通りで、またフーコー通りの中間地点から南東に延びる街路はレセブル通り (a) である。いずれもシャルネ提督に従事した士官ないし士官候補生の名前である。

ここで言及されるシャルネ提督とは、1861年に司令官としてコーチシナ東部3省を占領したフランス海軍の提督である。当該人物の名はサイゴン河と直結する大通りに刻まれている。シャルネ大通りはかつて、サイゴン河からザーディン城へ水を供給するために引かれた運河であった。この運河はキンロン (Kinh Lon)、直訳すれば大運河と呼ばれ、1790年に後のザーロン帝、グエン・アインが掘削を指示したという。運河付近には布地を商う華人の市場があり、このエリアは布市場地区とも呼ばれていた^{注7}。さらにフランス人は、大運河のフランス語訳であろうグラン (Grand) 運河と読み替えていた。フランスの侵略後、1861年には当該運河がシャルネ運河に改称され、1887年には運河からの悪臭などが原因で埋め立てが進んで大通りとなった²¹⁾。

再び、図2-2の北側に目を転ずると、フーコー通りの西側にアヴァランシュ運河 (現:ティゲー運河) を架橋するマルタン・デ・パリエール通り、その街路に隣接するガリマール通り (b)、ノエル通り (c) を視認できる。いずれもコーチシナ征服に関わった、海兵隊、陸軍などの軍人の名を冠している。またマルタン・デ・パリエール通り南端から延びる街路がアリエス通りであり、当該人物は1860年から1861年にかけてコーチシナ総督代理を務めたフランス海軍

士官であった。

シャルネ大通りと直交する街路は、それぞれボナール大通り、スペイン通りである。スペイン通りとは、文字通りコーチシナ征服に協力したスペイン王国に由来し、ボナール大通りは、フランス海軍の提督でコーチシナ知事を務めた人物に起源をもつ。スペイン通りの北西に平行する街路がパージュ提督通りである。海軍将校パージュは、コーチシナにおける軍事行動を指揮し、コーチシナ総督も歴任した。興味深いことにパージュ提督通りとスペイン通りの間には、マニラからダナン占領に参加したスペイン軍の指揮官の名前を冠するパランカ通りが布置されている。またシャルネ大通りの北東、スペイン通りとサイゴン河を結びつける街路がプリモーゲ大通り (d) である。表1にみる小分類で提督・征服に位置づけられ、コーチシナでの軍事作戦で使われた蒸気船の名称であり、ルーツを辿ると15・16世紀のフランスの提督に行き着く。

シャルネおよびプリモーゲ大通りの中間に位置する街路はドゥダール・ド・ラグレ通り (e) である。この人物はフランス海軍士官であり、フランシス・ガルニエとともにメコン川の調査任務を行った探検隊長であった (表1小分類で船員・外交官・探検家)。そのフランシス・ガルニエは、ドゥダール・ド・ラグレ通りの東端、フランシス・ガルニエ広場として名を残している。

次に図2-2中央南側のサイゴン駅付近に、ブルデ通り、この通りにほぼ垂直に交わるアムラン通りを確認できる。いずれもコーチシナ征服時に活躍した海軍将校の名前である。ブルデ通り西側には、マルシェス通り (f) およびボレッセ通りがほぼ平行している。海軍将校であるマルシェスは、表1における小分類では海兵歩兵連隊将校に位置づけられる人物で、コーチシナ軍の上級司令官、タイニンで起きたカンボジア人の反乱により殉職した。ボレッセはまた、植民地経営の管理業務に貢献したフランス海兵であった。

このカテゴリーでは以上から、海軍を中心としてコーチシナ征服に貢献した人びとが顕彰される形で街路名になっており、都市の動脈ともいえる大通りにはまた、提督の名が付与されている。加えて、軍事行動に協力したスペインおよびその指揮官が街路名にみられることは外交的な配慮であろう。あわせ

て植民初期に不可欠ともいえる探検家の名が刻まれていることも忘れてはならない。しかしながら、この分類のうち最長の街路に対して、ナポレオン3世に仕えたフランスの貴族・政治家かつ海軍植民地大臣であった、シャスルー・ローバの名が残されていることは植民地主義のアジェンダを色濃く反映している。

3. キリスト教

図2-3を一瞥すると、中央の十字路ならびにその北側に位置する同じく十字路が目射る。ペルラン通りのペルランは、インドシナ征服時代に政治的役割を果たした司教であり、西コーチシナ使徒代理を務めた。タベールはまた、パリ外国宣教会の宣教師、司教であり、ラテン語・ベトナム語辞書を出版したことで名を知られている。タベール通りの東端から延びる街路はルシアン・モサール通りで、この人物は宣教師・司教であり、西コーチシナ使徒代理、タベール学院の院長を務めた。またルシアン・モサール通りから北西へと延びる街路はド・ケラン通りと呼ばれ、当該人物は人道的活動のためタベール学院を設立したサイゴン教区司祭であった。タベールに所縁がある教会関係者の名前を冠する街路がタベール通りに連結していることは注意を引く。

北側の十字路はそれぞれソイエ通りおよびミシェ通りである。両名とも宣教師であり、ミシェはカンボジア使徒代理を務めるとともにカンボジアのフランス保護領設置に尽力した外交官でもあった。サイゴン大聖堂の司教であったコロネルの名を冠した街路はまた、タベール通りに平行し、サイゴン大聖堂に隣接する。

南側に目を転ずると、ルイ兄弟通り・ルフェーブル通りが布置されている。前者がフランス領インドシナの教育活動に従事した宗教家であり、後者がサイゴンの地域医療の祖とも呼ばれる、植民地での布教活動を行った司教で西コーチシナ使徒代理を務めた。

宣教師たちの多様な使命感・価値観を認めるとしても、このカテゴリーにおける街路の名付けから、植民地主義と布教活動とにみられる相互依存の関係を読み取ることがあながち間違いとはいえない。

4. 提督・総督

まず提督とは艦隊の司令官、海軍の将官であり、総督とは海外植民地や自治領、属州などを統治する行政長官の官職名である。前述のようにBaudrit (2020) は、その分類において「提督・総督」を一つのカテゴリーとしている。このことから、コーチシナにおけるフランス海軍の占める地位の高さを推測可能であろう。図2-4に目を向けると、先の「征服」カテゴリーの街路布置との相似性が注目される。図2-4の周辺部を例外とすれば、中心街においては、北西に平行移動させた街路にその名がついている。フランス領インドシナ総督では、第2代総督のリショー、ならびに第5代総督ルソーの名が刻まれている。リショー通りと平行するラ・グランディエール通りは、フランス海軍の最高司令官かつコーチシナ総督の名前に由来する。同街路の北東方向で、垂直に交わるのがラフォン通りで、この人物もまたフランス海軍の将軍でコーチシナ総督を務めた。

ラ・グランディエール通りの南東にはコルヌリエ・ルシニエール通りが走っている。コルヌリエ・ルシニエールもまたコーチシナ総督を務めた、フランスの海軍将校・政治家であった。当該街路とともにT字路をなす、デュプレ提督通りのデュプレ提督は、海軍将校で同じくコーチシナ総督として植民地経営に従事した。この提督はまた紅河通航権獲得交渉のためフランシス・ガルニエを派遣したことで知られる。この街路は先に引いたフランシス・ガルニエ広場と隣接している。偶然の一致かもしれないものの興味を引く。

5. 政治家・官吏

図2-5の北側に目を向けると、ポール・バール大通りがほぼ東西に布置されている。動物学者かつ生理学者でもあるポール・バールは、政治家としてアンナン、トンキンの常駐将軍に任命された。この通りの北部には、ほぼ平行して4本、T字路で1本の街路がみられる。ポール・バール大通りに平行する街路が北からジャック・ジュベール通り (a)、ポール・ブランシャール通り (b)、ジャン・デュクロ通り (c)、ジャン・マゼ通り (d)、T字路をなすのガルネ・エロー通り (e) である。これらの街路名はすべてが

行政官の名である。1920年代の旧版地図を確認すると、当該地域は、ポール・ベール大通り沿線を除き、未開発状態であった。このことから、その後街区の整備がなされて市街地化し、功績があった行政官の名前を集中的に名づけたと考える。

図2-5の中央に目を向けると、総督官邸から北東へと延びる街路、さらにその街路と直角に交わる長い通りが布置されている。前者はノロドム大通り、後者はポール・ブランシー通りである。ノロドムはカンボジア国王であり、ノロドム1世とも呼ばれた。フランス植民地以前から存在していたこの街路は、当初、政府通りと呼ばれており、その後、この地を訪れたことがあった、カンボジア国王の名を冠することになったという²²⁾。ポール・ブランシーは、政治家であり、コーチシナ植民地評議会議長であり、また初代サイゴン市長を務めた。

西側にはノロドム大通りと平行するように二本の通りがみえる。ノロドム大通りに近接する街路がルグラン・ド・ラ・リライユ通り、その北西がメイヤー通りである。ルグラン・ド・ラ・リライユは、外国使節団の宣教師として来訪し、先住民司法局に所属しつつ、提督の通訳を務めた。メイヤーとは、サイゴンの建設業者であり、市議会議員、副市長を務めた人物である。

総督官邸に空間的に遮断されつつノロドム大通りと軌を一にする街路は、デュラントン通りであり、デュラントン通りからサイゴン駅に向けて分岐するのがラコット通りである。いずれもサイゴンで行政官を務めた人物に由来する街路名となっている。

興味深い点として、このカテゴリーでは、ベトナム人が街路名として登場することがあげられる。図2-5南西にはグエン・タン・ギエム通りが布置され、先に触れたポール・ベール大通りの南側、かつポール・ブランシー通りと垂直に交わるのがグエン・ヴァン・ドゥオム通りである。いずれの街路名も長期間にわたり植民地市議会議員を務めた人物を起源とする。図から容易に視認できるように、これらの街路が中心部から離れている点はまた植民地という支配装置の特異性をうかがわせる。

6. 民間

名付けられた街路の距離の長さ、顕彰の度合いが正比例の関係にあると仮定した場合、このカテゴリーで名付けられた街路は短距離のそれが多く、顕彰のレベルが相対的に高くないと想定される。別言すれば、植民地支配という特殊空間において、こうした人物が必ずしも評価されていなかった可能性が示唆される。

図2-6の北側、ピエール通りの名の由来である人物は、フランス海軍の庭師としてサイゴン植物園の園長に就任し、インドシナと近隣地域の森林資源を調査・研究した。これに対して、ピエール通り南東に位置する植物園前の通りは、アンジール博士通りと名付けられている。元1等植民地医師であったこの人物と植物園との関連性は詳らかではない。中央東側には、パスツール通り、ドルメイ通りが布置する。パスツールは、言うまでもなく天然痘、コレラ、狂犬病などの感染症研究とワクチン開発で功績をあげた生物学の世界的権威であり、細菌学の父とも呼ばれる。ドルメイはまた、コーチシナ保健局長、フランス海軍の主席医師を務めた。

現在のホーチミン市の第1区に目を転ずると、パスター(Pasteur=パスツール)通りのみの名が残り、かつ市内中央を走る基幹街路になっている。このことから、権力編成の変化と街路の名付けの相関関係を読み取ることができる。

7. 欧州大戦（人名）

すでにみたように旧版地図において、欧州大戦、すなわち第一次大戦に由来する街路名が最も多い。また図2-7・8に示されるように市街地南部に集中的に名づけられている。そのなかで図2-7北部には、アルベール1世大通りが位置する点がまず注目される。アルベール1世は、第3代ベルギー国王であり、第一次大戦において、中立国ベルギーを守ることを最優先しドイツ軍の侵攻に激しく抵抗した。このアルベール1世通りと垂直に交わる街路がマルセル・リシャール通りで、平行するのがルネ・ヴィジェリー通りである。両名共に第一次世界大戦の戦死者であり、いずれもサイゴン出身者であった。

ここでサイゴン出身者ないし仏印にゆかりのある

人物と街路名を絡めると、フランス陸軍大佐の名に由来するブドネ大佐通りとほぼ垂直関係にある3本の街路に目が移る。東から、ギユイロー兄弟通り、ロジェ・マスラル通り、ルシアン・ラクチュール通りと名付けられている。いずれの人物も在サイゴンの商工業従事者の子息で、ギユイロー兄弟の弟を除き、第一次大戦において戦死している。ギユイロー兄弟通りと直交する街路は、レオン・コムベス通りである。フランスの軍曹であるこの人物もサイゴン出身で、第一次大戦に従軍・戦死した。

その他、サイゴンに所縁がある人名を有する街路は、このカテゴリーの4割弱を占める。このことから、第一次大戦という大局的な現象のなかでもローカルな名付けが行われていたといえよう。他方においてこれらの人物は、フランス本国において街路に名を残した可能性が低ばかりでなく、多くのサイゴンの人びとにとっても全く親近感がなかったことが想像される。

サイゴン駅に空間的に隔てられ、ブドネ大佐通りに平行するのがガリエニ指揮下で頭角を現した陸軍大佐の名を残すグリモー大佐通りである。そのガリエニは、大通りとしてグリモー大佐通りの南に布置されている。ガリエニ大通りに直交し、第一次大戦でイギリス陸軍大臣を務めたイギリス陸軍元帥の名を冠するキッチナー伯爵大通りと平行する街路がフィン・クアン・ティエン通りである。ベトナム人の名前を持つこの人物は第一次大戦の戦死者ではなく、病死している。ベトナム南部に生まれ、フランスの製粉工場で働いていたと叙述されているものの、第一次大戦にカテゴリー分けされた上で街路名として名を残している理由は詳らかではない。

この分類のなかでベトナム人の名を有するもう一つの街路がドー・フー・ヴィ通りである。この人物はフランス軍に従軍したベトナム人初の飛行士であり、第一次大戦において戦死している。この通りは中央市場（現：ペンタイン市場）の東側、さきに引いたシャルネ大通りの西側で直角に交わる街路である。

8. 欧州大戦（地名）

図2-8を一瞥すると、先の人名カテゴリーと比して縦軸に展開し、かつ比較的長距離の街路が目につ

く。街路名のほとんどの地名が第一次大戦におけるドイツ軍との激戦地やフランス軍が戦果をあげた地である。そのなかで、ソナム通り西側で起点を同じくしほぼ南下するアルザス・ロレーヌ通りが目を射る。周知のごとく、同地はドイツと支配権を争ってきた国境に近い領域であり、第一次大戦のドイツ敗戦によりフランスの領有権が認められた。ここからナショナリズムの喚起とともに領域支配への意思をも看取されよう。

注目すべき点としてまた、ベルギーに由来する地名が街路名に含まれることがあげられる。ベルギー河岸通りは、ドイツの侵攻に対するベルギーの抵抗を称賛して目抜き通りに命名されている。さらにシノワ運河（現：ベンゲー運河）の河岸に走るベルギー河岸通りと垂直関係にあるルーヴァン通りは、第一次大戦においてドイツ軍による虐殺が行われたベルギーの都市名に由来する。この街路は北上するとディクスミュイド通りと名前を変える。そこから旧サイゴン駅に遮られつつもディクスミュイド通りと直線的な位置関係にある街路がイーパル通りと呼ばれる。両街路ともにベルギーの地名である。前者が第一次大戦においてフランス海兵隊が戦果を挙げたベルギーのフランドル地方の都市、後者がベルギー西部フランデレン地域の都市で第一次世界大戦の激戦地のひとつであった。以上から、先にあげたアルベール1世とあわせてベルギーに由来する街路名がフランス植民地に複数存在していたことになる。言い換えれば、ここには第一次大戦というナショナルな領域性をこえた戦争の徴表が刻まれている。

さらにこのカテゴリーでは、北東部のマッシージュ通り、東部のアルゴンヌ河岸通りをのぞき、南部・南西部に街路名が集中していることも特徴としてあげられる。新ペンタイン市場（中央市場）の完成、サイゴン駅の同地への移転、チョロンを結ぶガリエニ大通りの開通のいずれもが1910年代であること²³⁻²⁵⁾に鑑みて、このエリアはフランス植民地時代の中心街の中でも新興地区と位置づけることができる。換言すれば、街区の周縁部であれ、第一次大戦に与する名を布置しようと試みる権力の意志が垣間見られる^{注8}。

V. むすびにかえて ――街路の布置構成

本論文は、フランス植民地時代に作製された旧版地図に刻まれた街路名を参照しつつ、第1に植民地主義的な介入がおこなわれたサイゴンの都市空間を、街路の名付けから叙述すること、第2にパノラマ的な視点との混淆状況を紡ぎ出すための予備的な考察をおこなうことを目的とした。

本論の考察から以下の点を指摘できよう。まず、仏印時代のサイゴンの街路名は、フランスの植民地支配の物語として表れていることがあげられる。具体的には征服以前の介入にはじまり、征服・統治のストーリーが街路名から読み取ることができる。街路の名付けはまた、地名よりも人名が多いことから、領域的な支配を正当化するという以上に、個人を顕彰する訳合いが強いといえよう。

次に距離が長い街路に対して、宗主国からみて顕彰の水準が高く位置づけられる人物の名が付与される傾向がみられる。こうした趨勢はとくに、カテゴリーでいえば、「提督・総督」、「政治家・官吏」に表れている。これに対して「民間」カテゴリーでは、パストールのような著名な人物であっても、その名が刻まれた街路は必ずしも主要なそれとはいえない。言い換えれば、この時代の街路名には植民地支配の暴力性が色濃く刻まれているととらえることができる。他方において、必ずしも植民地支配には連関しない、フランス本国での著名人が主要な街路名に付与されるケースがわずかながらみられることも指摘すべきであろう。

第3に第一次大戦の破壊的なインパクトが遠く仏印時代のサイゴンの地にも及んでいることがあげられる。カテゴリー別街路名において、その数が最大となっていることはその証左であろう。このことは、必ずしも権力編成に変化が生じなくとも社会がひとたび動乱状態に陥ると、街路の名付けにも変更が加えられることを示している。

第一次大戦のカテゴリーではまた、地名に由来する街路の名付けが多いことも特徴であるものの、植民地出身者かつ大戦での戦死者が顕彰される形で街路に名を残している点に目が向く。フランス本国において植民地出身者かつ戦死者が街路名の候補になるとは想像しがたいことから、植民地当局が独自の

基準を持って街路名を付与していたととらえられる。Baudrit (2022) によれば、ルシアン・ラクチュール通りは例えば、1919年7月、サイゴン当局によって同地出身の戦没者を追悼する一環としてその名が街路に付与されたという。こうした名付けは、前述した植民地支配に関連しない街路名の付与とともに、宗主国（本国）と植民地当局とが必ずしも政治的に一枚岩ではなかった可能性を提示している。

第4に植民地の街路名は必ずしもフランス本国ないし植民地の領域に限定されないことがあげられる。コーチシナ征服に協力したスペイン王国だけでなく、第一次大戦カテゴリーには、イギリス陸軍元帥の名やベルギーにまつわる街路名がみられる。とくにベルギー河岸通りは、チョロンとサイゴンとを陸運・水運で連結する基幹道に位置づけられる。19世紀末の旧版地図ではこの通りがシノフ運河岸通りと記されていることから、第一次大戦の終結を機に改名したと推察できる。こうした脱領域性は、第一次大戦における敵味方の境界だけでなく、パリの街路名にみられるコスモポリタニズムを反映しているとも領解される^{注9}。以上から、フランス植民地期のサイゴンにおける街路の名付けは、同時代的な社会状況のダイナミズムに埋め込まれた、ポリフォニックな権力編成に基礎づけられていたととらえられる。

最後にパノラマ的な視点との混淆状況を紡ぎ出す点に敷衍させて、今後の着眼点を指摘しておきたい。第1に、街路名の変遷についての探求である。前述のごとく権力の編成が別のそれにとって代わると、街路名は可及的速やかに変更される可能性をはらむ。とくに植民地という重層的な権力編成にあったサイゴンがナショナルなそれに置き換わるプロセスに注目しつつ、街路名の変遷を把握してゆきたい。

第2に、最初の着眼点とは矛盾撞着に陥るかもしれないものの、街路名の多面性に注目したい。すでにみたように街路の名付けは何らかの顕彰を含意する。ベンヤミンによれば、「＜顕彰＞ないし擁護は、歴史過程のなかにある革命的瞬間を被い隠そうと」（「セントラルパーク」²⁶⁾）するものである。このことから「覆い隠そうと」する瞬間それ自体に着目する必要がある。換言すれば「そうした絶壁や岩角こそが、乗り越えようとする者に足場を提供してくれるのである」（「セントラルパーク」²⁷⁾）。

例えば、シャルネ通りは、ベトナムの人びとの間ではキンラップ通りと呼ばれていたという²¹⁾。推測の域を出ないが、Kinh Lapとは、Lapが「埋め立てる」という動詞であることから、文法的には語順が異なるものの、「運河を埋め立てた」というニュアンスであろう。言い換えれば、大運河ないしチョバイ（布市場）運河が埋め立てられたという、その記憶が場所の記憶ないし記憶の場所として街路名に刻まれていたのかもしれない。どちらせよ、シャルネ通りを別名で呼ぶという実践、ド・セルトー（2021）のことはを借りれば戦術²⁸⁾を現地の人びとが採用していたことを確認できよう。

さらにまた、ことばの響きの読み替えがあげられる。すなわち現地の人びとにとって外来語であるフランス語の音をベトナム語に置き換える行為である。ボレッセ通りは例えば、Bo-retと呼ばれていたという²⁹⁾。活字にした場合、ハイフンでつながれていることから、外来語であることが想定可能なものの、それぞれの単語を辞書で引くと、Bo (telex入力でboof) が「竹かご」、「親しい友人、恋人」、「保水目的で築いた畦」、「蒲柳の質」など多義的な意味を有する。ret (同reetj) はまた、単独で使用されることがないものの、例えばro retが「明らかな」を意味する。このことから、植民地経営に貢献した象徴としてのフランス海兵ボレッセは、現地の人びとの間ではアレゴリー化し、多声的・人為的なパロールとなっていた可能性が窺い知れる。これはまた、植民地主義的連関を解体し、破壊していたとも言いうるであろう。

確かに旧サイゴンの地名であり、現在もその名が残るDa Kaoのように、入植者が現地のことばの音を読み替えていた例はよく引かれるものの、現地の人びともまた入植者のことばに対して同じような行為を実践していたととらえてよいだろう。換言すれば、植民地主義的な介入に対して、宗主国のことばを換骨奪胎し、別のイメージを想起していたといえる。

あくまで二つの事例にすぎないかもしれないものの、こうした例はややもすればナショナルな装置に回収されがちな街路名を、日常的な「抵抗」のなかで取り戻そうと試みた実践を示している。このような事柄を掘り起こしてゆくこともまた今後の課題である。

注

注1 この地は、かつてクメール系の人びとが多く居住し、プレイノコールと呼ばれ、インドシナ半島中部高原からの森林物産の集散地となっていた。こうした歴史も等閑視することができない。本稿ではしかしながら、街路のルーツの研究という視点からこの歴史的な背景を直接的に論じない。

注2 ホーチミン市は、ベトナム語でThanh pho Ho Chi Minhとなる。Thanh phoとは市（ここでは中央直轄市Thanh pho truc thuoc trung uongの意）を意味する普通名詞である。一部の人びとは、このThanh phoを、ホーチミン市を指す単語に置き換えている。例えば、ホーチミン市へいく（上京する）ことを、len Thanh phoと発話することがある。

注3 地理学分野では、都市論の胎動に位置づけたベンヤミン論がみられる（大城、2006）³⁰⁾。また遊歩者（ベンヤミン）の知覚という点では、『パサージュ論』初期覚書集に納められている「パサージュ」の記述が参考になる³¹⁾。

注4 三島によれば「ベンヤミンはシニフィアンとシニフィエの関係の恣意性というソシュール以来のテーゼは知っていたが、それにはいかなる興味も示さな」かったと指摘している³²⁾。この点は、ベンヤミン初期の晦渋な論考「言語一般および人間の言語について」³³⁾にその思想がよく表れている。

注5 ベンヤミン（2020）にはただし、訳注で漢文が添えられている。このことから、漢詩である可能性が高い。同詩の邦訳は以下となる（／は改行の意）。「水は碧く、樹々は紅いに染まり、／目に甘く映る夕暮れの景色／そぞろ歩きの人々。淑女方の散策。／後につく少女たち。」³⁴⁾。Nguyen Trong Hopについては、ウィキペディアのベトナム語エントリー³⁵⁾に教わった。またDoumer（2015: 290-294）³⁶⁾も参照のこと。

注6 ニーチェは周知のごとく、この時代の雰囲気を感じていち早く批判していた。例えば、ニーチェ（1993）³⁷⁾、とくに第1論文および第2論文を参照のこと。

注7 ただし、この運河自体をチョバイ（布市場）運河と言及する文献もみられる³⁸⁾。なお、ベトナム語で運河は一般的にはkênhであるものの、南部ではkinhと呼ばれることもある。

注8 しかしながら、この点を詳らかにするためには、軍のエンジニアであったコファンによるサイゴンの都市計画および開発過程の分析およびそれとの摺り合わせが不可欠である。これは今後の課題としたい。

注9 今回分析対象にした旧版地図の凡例では確認できなかったものの、仏印時代のサイゴンにはホンコン通り、シャンハイ通り、バタヴィア通り、ヨコハマ通りなどが存在したという³⁹⁾。これもまた、サイゴンの街路名がコスモポリタンの雰囲気を醸し出していた一例といえよう。

文献

- 1) 大塚直樹, 丸山宗志, 松村公明, 「旧サイゴン
囲郭地区における行政機能の変遷と都市景観
の特色」『立教大学観光学部紀要』16, pp.89-
98 (2014).
- 2) 松村公明, 大塚直樹, 「外邦図から読む新旧サイ
ゴン駅の立地と都市空間の再編」『立教大学
観光学部紀要』14, pp.143-158 (2012).
- 3) 大塚直樹, 「街路のエクリチュール——サイゴ
ンからホーチミン市へ」『樞——国際関係・多
文化フォトジャーナル』9, pp.16-23 (2022).
- 4) 鹿島茂, 『『パサージュ論』熟読玩味』青土社〔新
装版〕, p.162 (2004).
- 5) 鹿島 (2004) 前掲書 pp.157-160
- 6) ベンヤミン W. (今村仁司ほか訳), 『パサージュ
論 3』岩波文庫, pp.359-360 (2021).
- 7) ベンヤミン W. (2021) 前掲書 p.368
- 8) 鹿島 (2004) 前掲書 p.166
- 9) 近森高明, 「街路名の理論のために——ベンヤ
ミンにおける言語・記憶・都市」『ソシオロジ』
48 (3), pp.35-51 (2004).
- 10) 近森 (2004) 前掲書 pp.39-40
- 11) 近森 (2004) 前掲書 p.40
- 12) ベンヤミン W. (2021) 前掲書 p.364
- 13) ベンヤミン W. (2021) 前掲書 p.371
- 14) 三島憲一, 『ベンヤミン——破壊・収集・記憶』
岩波現代文庫, p.445 (2019).
- 15) ベンヤミン W. (今村仁司ほか訳), 『パサージュ
論 1』岩波文庫, p.24 (2020).
- 16) ベンヤミン W. (浅井健二郎編訳), 『ベンヤミ
ン・コレクション3 記憶への旅』ちくま学芸
文庫, p.236 (1997).
- 17) ベンヤミン W. (浅井健二郎編訳), 『ベンヤミ
ン・コレクション4 批評の瞬間』ちくま学芸
文庫, p.366 (2007).
- 18) 三島 (2019) 前掲書 p.422
- 19) ベンヤミン W. (1997) 前掲書 p.235
- 20) Baudrit, Andoré *Guide Historique des
Rues de Saigon*, Les Entreprises coloniales
françaises, (2022) [Société des imprimeries
et librairies indochinoises, 1943]. <[https://
www.entreprises-coloniales.fr/inde-indochine/
Baudrit-Rues_Saigon.pdf](https://www.entreprises-coloniales.fr/inde-indochine/Baudrit-Rues_Saigon.pdf)>
- 21) VnExpress紙 (25/10/2015).
[https://vnexpress.net/duong-nguyen-hue-
dong-kenh-thanh-quang-truong-di-bo-dau-
tien-3297016.html](https://vnexpress.net/duong-nguyen-hue-dong-kenh-thanh-quang-truong-di-bo-dau-tien-3297016.html) (閲覧日 2024.5.11).
- 22) VnExpress紙 (19/2/2018)
[https://vnexpress.net/nam-dai-lo-dau-tien-cua-
sai-gon-xua-3712377.html](https://vnexpress.net/nam-dai-lo-dau-tien-cua-sai-gon-xua-3712377.html) (閲覧日 2024.5.24).
- 23) Tran Nhat Vy, *Tu Ben Nghe toi Sai Gon*, Nxb
Van Hoa-Van Nghe TP. HCM. p.47 (2015).
- 24) Tran Nhat Vy (2015) 前掲書 p.287
- 25) Thanh Nien紙 (03/04/2016)
[https://thanhvien.vn/loi-xua-xe-lua-
my-185550752.htm](https://thanhvien.vn/loi-xua-xe-lua-my-185550752.htm) (閲覧日 2024.5.11).
- 26) ベンヤミン W. (浅井健二郎編訳), 『ベンヤミ
ン・コレクション1 近代の意味』ちくま学芸
文庫, p.361 (1995).
- 27) ベンヤミン W. (1995) 前掲書 p.361
- 28) ド・セルトー M. (山田登世子訳), 『日常的実
践のポイエティック』ちくま学芸文庫, (2021).
- 29) Tran Huu Quang, *Ha tang do thi Sai Gon buoi
dau*, Nxb. Tong Hop TP. HCM. p.24 (2012).
- 30) 大塚直樹, 「ヴァルター・ベンヤミン——遊歩者
と都市の幻像」『都市空間の地理学』ミネルヴァ
書房, pp.17-29 (2006).
- 31) ベンヤミン W. (浅井健二郎編訳), 『ベンヤミ
ン・コレクション6 断片の力』ちくま学芸文
庫, pp.556-561 (2012).
- 32) 三島 (2019) 前掲書 p.127
- 33) ベンヤミン W. (1995) 前掲書 pp.7-36
- 34) ベンヤミン W. (2020) 前掲書 p.24
- 35) Wikipedia : Nguyen Trong Hop
[https://vi.wikipedia.org/wiki/
Nguy%E1%BB%85n_Tr%E1%BB%8Dng_
H%E1%BB%A3p](https://vi.wikipedia.org/wiki/Nguy%E1%BB%85n_Tr%E1%BB%8Dng_H%E1%BB%A3p) (閲覧日 2024.5.24).
- 36) Doumer, P., *Xu Dong Duong: hoi ky*, Luu Dinh
Tuan et al dich, Nxb. The Gioi. pp.290-294
(2015).
- 37) ニーチェ (小倉志祥訳), 『ニーチェ全集4 反
時代的考察』ちくま学芸文庫, (1993).
- 38) Tran Huu Quang (2012) 前掲書 p.37
- 39) Tran Huu Quang (2012) 前掲書 p.155-156